

4. glioma の悪性度別での $^{201}\text{TlCl}$ の集積動態の差異 ——dynamic SPECT を用いて——

周郷 延雄 黒木 貴夫 清木 義勝
柴田 家門 (東邦大・脳外)

[目的] glioma に対して短時間データ収集の dynamic TlCl SPECT を施行し、その Time Activity Curve (TAC) と悪性度を比較した。[方法] 対象は glioblastoma (GB) 17, anaplastic astrocytoma (AA) 7, low grade glioma (LG) 6 例である。TlCl 静注直後から 1 分毎 15 分間の dynamic scan を施行、全 15 分間のデータから腫瘍部での Thallium Index (TLI) を求めた。1 分毎 15 分間のデータを 3 分毎 5 ケのデータに加工し、腫瘍部における投与後初期 3 分間の絶対値を各 6, 9, 12, 15 分での絶対値から引いた差で TAC を描いた。[結果] TLI では GB は、AA, LG よりも有意に高値を示したが、TLI における各群の境界は存在しなかった。一方、GB の TAC では、初期 3 分間に比較して、6, 9, 12, 15 分の集積は増加したのに対して、AA では変化はなく、LG では 6, 9, 12, 15 分で減少した。さらに GB 群の 88.2% で初期 3 分に比して 6, 9, 12, 15 分は増加し、反対に AA 群の 71.4%, LG 群の 100% で低下を示した。[結語] TLI のみでなく、TAC をとらえることで、より信頼性の高い悪性度の診断が可能と思われた。

5. サルコイドーシス患者における核医学的検討： ^{67}Ga シンチグラフィにおける唾液腺集積と唾液腺シンチグラフィとの比較

土持 進作 中條 政敬 田中 大三
庭月野 浩 中別府良昭 (鹿児島大・放)

サルコイドーシス病変の好発部位である唾液腺について ^{67}Ga シンチグラフィ (以下シンチ) と唾液腺シンチの比較検討を行った。サルコイドーシス患者 9 例に対して ^{67}Ga シンチを、7 例に対し唾液腺シンチを施行し、唾液腺への ^{67}Ga 集積程度、唾液腺シンチでの唾液腺集積程度と酸負荷に対する反応性を視覚的に評価した。全例で唾液腺に ^{67}Ga 集積が認められ、顎下腺では唾液腺シンチでの集積程度と反応性の間に負の相関が認められた。 ^{67}Ga シンチと唾液腺シンチでの変化を一元的に説明しうる結果は得られず、病態把握に際して注意が必要と考えられたが、唾液

腺シンチの変化として集積亢進と反応性低下を示す可能性が考えられた。

6. 肝細胞癌骨転移への $^{99\text{m}}\text{Tc-GSA}$ 集積について

末吉 公三 彭 信義 小森 剛
山本 和宏 中田 和伸 宇都宮啓太
松井 律夫 清水 雅史 植林 勇
(大阪医大・放)

骨転移を認めた肝細胞癌 10 例に対して $^{99\text{m}}\text{Tc-GSA}$ 全身シンチグラフィを撮像し、 $^{99\text{m}}\text{Tc-PMT}$ 全身シンチグラフィ、骨シンチグラフィと比較検討した。 $^{99\text{m}}\text{Tc-GSA}$ 、 $^{99\text{m}}\text{Tc-PMT}$ 全身シンチグラフィはほぼ同様の集積率であったが、集積の程度に違いがみられ、集積の解離する症例も認めた。骨シンチグラフィの集積率は、 $^{99\text{m}}\text{Tc-GSA}$ 、 $^{99\text{m}}\text{Tc-PMT}$ 全身シンチグラフィに比して高かったが、骨折や変性疾患で偽陽性を示し、溶骨性変化の強い部位では偽陰性を認めた。骨転移集にも分化度の高いものはアシアロ糖蛋白レセプタを有する可能性が示唆された。 $^{99\text{m}}\text{Tc-GSA}$ 全身シンチグラフィは、肝細胞癌の骨転移に集積するため、肝予備能検査後に全身像を追加することで骨転移の検索が行える可能性が認められた。

7. $^{99\text{m}}\text{Tc-MIBI}$ SPECT による過機能性副甲状腺結節の検出

野口 靖志 牧 正子 小林 秀樹
百瀬 満 金谷 信一 金谷 和子
日下部きよ子 (東京女子医大・放)

$^{99\text{m}}\text{Tc-MIBI}$ による過機能性副甲状腺結節の診断の限界について検討した。対象は 1994 年 3 月～1998 年 3 月の 4 年間で $^{99\text{m}}\text{Tc-MIBI}$ を施行した 73 症例中、組織診断の得られた 42 症例、52 結節で、内訳は原発性 33 症例 (43 結節)、原発性術後再発 5 症例 (5 結節)、二次性術後再発 4 症例 (4 結節)。組織学的には adenoma 27 結節、hyperplasia 25 結節であった。多発結節症例は 4 症例認められ、いずれも hyperplasia であった。

$^{99\text{m}}\text{Tc-MIBI}$ Planar, SPECT の sensitivity はそれぞれ 78.8%, 84.1% でエコーの 64.6% を上回った。adenoma, hyperplasia の検出率はそれぞれ 96.3%, 60.0% であった。検出されなかった結節はすべて 150